

## 清朝官吏の見た George Thomas Staunton

松浦 章

### I 緒言

東アジア世界の中で中国は永きにわたり文化発源の中心として位置していたため諸外国の人々が訪れる国であったが、言語が異なるため通事を介しての交渉がほとんどの場合において必要としている。その具体例としてすでに明代の海外諸国の通事に中国人が介在した例を明らかにした。<sup>1</sup>

ところが、欧州諸国が清朝中国の文化に強い関心を持ち、各国が東インド会社を設立して欧州産の製品を中国に輸出し、<sup>2</sup>中国の物産を輸入しはじめると様々な接触形態が見られ、その実態の一端は廣州港の繁栄として世界に知られた。<sup>3</sup>

その強大な清朝中国に対して欧州側から積極的に外交交渉を行ったのが、イギリス国王ジョージ1世が派遣したマカートニーGeorge Viscount Macartney of Dervock 使節団<sup>4</sup>であった。そ

---

1 松浦章「明代海外諸国の通事について」『或問』第8号、2004年10月、75～84頁。

2 松浦章「清代の自鳴鐘について」『或問』第6号、53～65頁。

3 松浦章「清代廣州港の繁栄」『或問』第7号、2004年3月、15～25頁。

4 マカートニー使節団関係の書籍に次のものがある。

イーニマス・アンダースン著、加藤憲市訳『マカートニー奉使記』筑摩書房、1947年12月。イーニマス・アンダースン Aeneas Anderson はマカートニーの従者 Valet として使節団に随行した。

J.L.Cranmer-Byng; An Embassy to China, Being the journal kept by Lord Macartney during his embassy to the Emperor Ch'ien-lung 1793-1794,1962.

馬戛爾尼著、劉復訳『乾隆英使謁見記』臺灣學生書局、中國史學叢書續編、1973年9月。

坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社・東洋文庫 277、1975年9月。

[英] 斯當東著、葉篤義譯『英使謁見乾隆紀實』三聯書店（香港）有限公司、1994年4月。

[英] 馬戛爾尼著、白克好司著『乾隆英使謁見記』珠海出版社、1995年12月。

[英] 斯當東著、葉篤義訳『英使謁見乾隆紀實』上海辭書出版社、1997年6月。

秦国経・高換婷著『乾隆皇帝與馬戛爾尼』紫禁城出版社、1998年8月。

中国では1993年9月にマカートニー使節団の訪中200年を記念する討論会が開催され、張芝聯主編『中英通使二百周年學術討論會論文集』中国社会科学出版社、1996年5月が出版されている。

の使節団には僅か12歳の少年ジョージ・トーマス・ストーン George Thomas Staunton<sup>5</sup>が加わっていた。その少年は、使節団の副使であったジョージ・レナード・ストーン George Leonard Staunton の息子であった。彼 George Thomas Staunton は、マカートニーの侍童として加わり、欧州から中国までの航海中に通訳の中国人から中国語を学んでいたとされ、後に廣州に設けられたイギリス東インド会社の書記になり廣東で勤務し、かたわら中国語を研究し、1810年には清朝中国の刑法典である「大清律」を英訳し出版した人物でもあった。<sup>6</sup>

そこで本稿では、中国語を学習したとされる少年時代及び成人後の George Thomas Staunton について、清朝中国の官吏たちはどのように見ていたかについて、清朝官吏の奏摺に記された記録から探ってみたい。

## II マカートニーの日記に記された George Thomas Staunton

George Thomas Staunton がマカートニー使節団の随員に加わり、どのような状況にあったか、マカートニーの日記から見てみたい。日記は坂野正高氏によって『中国訪問使節日記』として翻訳されているので、ここではその翻訳から George Thomas Staunton に関する記事をあげてみたい。マカートニー使節団は1792年9月21日にイギリスのポーツマス岬から軍艦ライオン号とインド貿易船インドスタン号、補給船ジャコール号を伴い出帆し<sup>7</sup>、12月1日に南米のリオ・デジャネイロに投錨し<sup>8</sup>、その後、トリースタン・ダ・クーニヤ島、アムステルダム島、サン・ポール島などの南太平洋を横断しスダ海峽からジャワ島のオランダ統治のバタヴィア港へ、1793年3月6日に投錨した。<sup>9</sup>その後、コーチシナのツーロン湾に寄港して6月15日に出帆して、7月3日には舟山列島の水路に投錨している。<sup>10</sup>そして7月24日には天津に近い河口附近の湾に達したのである。<sup>11</sup>

1793年8月6日には、北京に赴くために迎える直隸総督の梁肯堂の迎えを受けた。

午前八時、私はサー・ジョージ・ストーンと彼の息子および通訳を同伴して、船から特に臨時に架けられた木橋—その上には筵を敷きつめ、緋色の絹で飾った手すりを付けて

<sup>5</sup> George Thomas Staunton は、1781年5月26日にイギリスのSalisburyの近くで生まれた。Samuel Couling ; *The Encyclopaedia Sinica*, 1917,p.526.

<sup>6</sup> 坂野正高「中国を英国の外交官はどのように見ていたか」『近代中国外交史研究』岩波書店、1970年7月、260頁。

<sup>7</sup> イーニヤス・アンダースン著、加藤憲市訳『マカートニー奉使記』15頁。

坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社・東洋文庫277、1975年9月、3頁。

<sup>8</sup> 加藤憲市訳同書、29頁。

<sup>9</sup> 加藤憲市訳同書、42頁。坂野正高訳注同書、3~4頁。

<sup>10</sup> 坂野正高訳注『中国訪問使節日記』、6、9頁。

<sup>11</sup> 坂野正高訳注『中国訪問使節日記』、14頁。

ある一を渡って上陸した。<sup>12</sup>

とある。これはマカートニー一行が天津まで英国船で渡来し、その後、北京の乾隆帝に会見に行く直前のことである。George Thomas Staunton は、副使である父に同伴していた様子的一端が見られる。

さらに同年 8 月 29 日の条にはマカートニーが、

ストーントンの坊やが、この場合の私の必要を満たすことができた。それというのも、航海のごく始めのころから、彼は二人の通訳について中国語を学びはじめたので、かなりの進歩をみせたのみならず、たいへん小ざれいに、かつ敏速に漢字が書けるようになっていたのである。それで、さきに礼物の目録を転写する時に既に役立つようである。<sup>13</sup>

と記している。マカートニーが乾隆帝に献上する品々の一部を George Thomas Staunton に書かせたのであった。それは彼が航海の初めから中国語を学習していて、それなりの程度に達していたようである。彼に中国語を教えたのは、ローマ教皇 Benedict の許可により Matthew Ripa がナポリにおいて 1725 年に創設した中国語学院で学んだ通訳者からと言われる。<sup>14</sup>

George Thomas Staunton に関する記事をマカートニーの日記からさらにに抜粋してみることにする。

1793 年 9 月 2 日の記事には、

午前六時に出発した。息子のストーントンと私は瀟洒なイギリス製の駅馬車に乗って行った。この馬車は私が用意して来たもので、背の丈十一ハンド [四十四インチ] を越えない小さな韃靼地方の馬四頭でひかれた。<sup>15</sup>

とあり、マカートニーが英国船でイギリスから持ち込んだ馬車に、George Thomas Staunton も同伴させて行った。

9 月 8 日には、

午後、大臣がサー・ジョージ・ストーントンと会いたいという希望を表明したので、彼は直ちに息子と通訳を伴って大臣の屋敷へ赴いた。<sup>16</sup>

とある。熱河の秘書山荘に滞在する乾隆帝との接見の交渉のために、清朝の大臣からの依頼で、サー・ジョージ・ストーントンは息子の George Thomas Staunton そして通訳を同伴して、大臣の屋敷に赴いている。

11 月 23 日の記述には、

---

<sup>12</sup> 坂野正高訳注『中国訪問使節日記』23 頁。

<sup>13</sup> 同書、58 頁。

<sup>14</sup> Samuel Couling ; *The Encyclopaedia Sinica*, 1917,p.526.

<sup>15</sup> 同書、67 頁。

<sup>16</sup> 同書、86 頁。

総督が書いてはどうかと勧めてくれた、彼の報告に添えて北京に送るべき例のあいさつ状を彼に渡した。書面の文字がすばらしくかっちりときれいに書かれているのを見て、だれが筆写しとかと彼はたずねた。子供のジョージ・ストーンが書いたのだと話すと、十二歳の男の子が既にこんなに上手になったとは、とても信じられないという様子で、本人が紙面の下の方に、それは自分が書いたものだとすることを漢字で書き添えるのを実際に自分の目で見て、ようやく本当に納得した。<sup>17</sup>

とある。マカートニー一行を内陸河川を利用して廣東の廣州まで送る際に同行した総督が、漢字で書かれた文書を見て、使節団の誰が書いたのかを疑った。ところが僅か十二歳であった **George Thomas Staunton** が書いたことを驚愕の目で見ていたのであった。

マカートニー一行が廣州に到着して以降の 1794 年 1 月の日記には、

われわれは中国人とできるだけ交わらないようにしており、中国人とは可能な限り異なった型の衣服をまとい、彼らの言語に関しては全く無知である（中国語はそんなにむずかしい言葉ではなさそうだ。というのは、子供のジョージ・ストーンは大分前からこれをきわめてやすやすと話したり書いたりすることを習い覚えていて、そのことがいろいろの場合に、どれだけ役に立って来たかわからない）。<sup>18</sup>

と記しているように、マカートニーにとって、**George Thomas Staunton** が学習し習得した中国語が、彼らの今回の訪問に極めて役立ったとの印象を記している。

以上が、マカートニーの日記に記された **George Thomas Staunton** の姿である。彼が僅か 12 歳で習得した中国語は、当時の清朝大官を呻らせるほどの力量に達していたことが知られる。この **George Thomas Staunton** は当時の清朝官吏からどのように見られていたのであろうか。清代の檔案史料から彼の姿を次節で探ってみたい。

### III 清朝中国官吏の見た **George Thomas Staunton**

マカートニー使節団の副使の子供として随行した **George Thomas Staunton** は、当時の清朝大官や、清朝の檔案史料などの記録にどのように見られるかについて述べてみたい。

乾隆五十八年（1793）七月初三日付の軍機大臣給徵瑞箭に、

箭者、本日奏到英吉利國貢使、帶赴熱河之官員等十五名、…又副貢使之子有無官職、係充何項差使節前來、抑係該貢使自行帶來。…右箭長蘆鹽政徵瑞。<sup>19</sup>

とある。軍機大臣から長蘆鹽政徵瑞に訓令には、乾隆帝が滞在している熱河まで英国使節一行 15 名を帯同するに際して、その中に副使の子供がいた。これが **George Thomas Staunton** であ

<sup>17</sup> 同書、182、183 頁。

<sup>18</sup> 同書、216～217 頁。

<sup>19</sup> 「英使馬戛爾尼來聘案」二十九丁表、『掌故叢編』所収。

るが、彼は官職もなく、使節の随員として帯同するとしている。

この George Thomas Staunton は、使節の一行に参加していたが故に、乾隆帝から様々な物を下賜されている。

同七月十二日には、

副使之子及総兵官等在如意洲東路等處瞻仰酌擬賞件

副使之子哆嗎嘶嚙東 鼻烟壺一個 五彩爐一對 大荷包一對

小荷包二個 紗緞共三疋<sup>20</sup>

とあるように、Georg Thomas Staunton は、鼻烟壺一個、五彩爐一對、大荷包一對、小荷包二個、紗緞共三疋などの物を乾隆帝より得たのであった。そして、

擬賞副貢使之子等物件單

副使之子等在含青齋西路等處處瞻仰酌擬賞件

八絲緞二疋 綿一疋 磁盤一件 皮茶桶一對 奶茶碗一對<sup>21</sup>

副使之子繪畫呈覽賞大荷包一對

賞副使 嗎嘶嚙東

龍緞一疋 粧緞一疋 倭緞一疋 青緞一疋 藍緞一疋 錦一疋 漳絨一疋

帽緞一疋 綾三疋 紡絲三疋 縐紬二疋 茶葉二瓶 磚茶二塊 茶膏一匣

女兒茶八個 藏糖一匣<sup>22</sup>

とあり、さらに八月初八日付の「軍機處奏片」によれば、

查英吉利國貢使於初十日、恭與萬樹園筵宴、除正副使應行加賞之件、業經臣等酌擬開單呈覽外、所有該副貢使之子、及總兵官等八名、今既令其一併入宴、…謹奏、八月初八日擬賞副使之子物件單

擬於萬樹園賞副貢使之子哆嗎嘶嚙東

龍緞一疋 粧緞一疋 錦一疋 漳絨一疋 羽縐一疋 素緞一疋 花緞二疋

小卷八絲緞一疋 綾一疋 紡絲二疋 磁器八件 十錦扇十柄 普洱茶四團

六安茶四瓶 茶膏一匣 冰糖一匣 雕漆盤一件 大荷包一對 小荷包四個<sup>23</sup>

とあり、副使の子と言う立場によって僅か12歳でありながら George Thomas Staunton は、龍緞、粧緞、錦、漳絨、羽縐など様々の下賜品を得ている。

年少の George Thomas Staunton が記した文章が「英使馬戛爾尼謝恩書」(文末の図1参照)として残されている。その全文を積文すれば以下の通りである。

<sup>20</sup> 同書、三十四丁裏。

<sup>21</sup> 同書、三十九丁表。

<sup>22</sup> 同書、三十九丁表、裏。

<sup>23</sup> 同書、五十五丁表。

英吉利国使臣嗎嘓爾尼謝  
 大皇帝恩典我們国王敬  
 大皇帝大福大壽實心恭順如令蒙  
 大皇帝看出我国王誠心准我們再具表文進獻實在是  
 大皇帝大壽萬萬年我們国王萬萬年聽  
 教訓這實在是  
 大皇帝的恩典也是我国的造化  
 大皇帝又不嗔怪我們又不限年月我們感激歡喜口不能說我国王也  
 此感激求  
 大人替我們奏謝  
 大皇帝恩典

此呈係哆嗎嘓嘓東 親手寫<sup>24</sup>

とあるように、確かに十代の子供が書いた書体であることは見て明らかであろう(図1<sup>25</sup>参照)。しかし、イギリスから中国までの数ヶ月の間に、英語圏で生育した子供が学習したとは思えないほどの実力を示した哆嗎嘓嘓東にとって重要な成果であったと言えるであろう。

その後、哆嗎嘓嘓東こと George Thomas Staunton が、中国の記録に頻出するのは、それから二十年後のことである。

嘉慶帝の嘉慶十九年十一月二十八日付の上諭に、

上諭、朕近聞本年八・九月間、有英吉利護貨兵船一隻、違例闖入虎門、經蔣攸銛派委營員管帶師船、前往驅逐、據英吉利夷目具稟、該國密理堅國、素有仇隙、因適遇該國夷船、恐其劫奪貨物用船防護以致誤入口門、悚惶謝罪等語。…又有英吉利夷人呵嘓東、前於該國入貢時、曾隨入京師、年幼狡猾、回國時、將沿途山川形勢、俱一一繪成圖冊、到粵後、又不回本國、留住澳門、已二十年、通曉漢語。定例澳門所住夷人、不准進省、呵嘓東因松筠前曾伴送該國夷使於松筠任兩廣總督、時遂來省稟見。…<sup>26</sup>

とある。嘉慶十九年(1814)八月、九月の頃にイギリスの軍艦が中国沿海の廣州湾口の虎門付近に出没したため、調査したところイギリス船であることが判明した。そのイギリス船の報告では、イギリスとアメリカとが敵対し、イギリス軍艦がアメリカ船を追跡して、誤って虎門口付近に至ったことを述べた。さらにイギリス人の呵嘓東即ちストーントンについての情報が見

<sup>24</sup> 『掌故叢編』

<sup>25</sup> 『掌故叢編』所収、写真。

<sup>26</sup> 『清外交史料嘉慶朝』四、24丁表、裏。

中国第一歴史檔案館編『嘉慶道光朝上諭檔』第19冊(嘉慶十九年)、廣西師範大学出版社、2000年11月918~919頁。

える。それによると彼は幼少の時、イギリスの使節に随行して北京に入った。幼少とは言え狡猾で、帰国時には送還の途上で見た中国の景観を詳細に絵図に描き、廣州に到着後は、イギリス本国に帰らず澳門に滞在して20年以上になり、中国語に精通していたと見られた。清朝の規定ではマカオに居住する外国人は廣州省城に入ることを認めなかった。しかし呵嚙東はかつて送還された際の清側役人であった松筠と旧知であることを理由に会見を求めたとある。

嘉慶十九年十二月初二日付の嘉慶帝の上諭にも、

密行查察呵嚙東、自幼狡猾、熟知内地情形、如在澳門、不甚妥協、斷不可驅令歸國、應摘其過失、酌量遷徙他處、防閑約束、庶爲處置得宜也。<sup>27</sup>

と見える。ここでも、呵嚙東について密かに調べられ、彼は幼少より狡猾で、中国の地理状況について詳しく知っており、妥協することなく帰国させるようにとの厳命が下されている。

兩廣總督蔣攸銛の嘉慶二十年（1815）正月二十八日付の奏摺に、

臣等當即密飭洋行總商伍敬元・盧棟華等、確切查覆去後、據稱查得英吉利夷人呵嚙東、曾於乾隆五十七年、隨同伊父副貢使航海由天津入都進貢、彼時該夷司當東僅十二三歲、其貢船、即於是年仍由海道回粵貢使等、由內河回粵、乘坐原船歸國。嘉慶四年、該夷呵嚙東復來粵貿易。…是年呵嚙東即在澳押冬、至六年回國。又於九年來澳押冬、至十二年回國、又十五年來澳押冬、至十六年回國。又於十九年由該國派令來澳充當三班、隨同大班・二班經理貿易事務、蓋大班・二班・三班係由該國派來專司賣貨物諸事、由大班經管二班・三班僅係協同襄理之人、各國駐澳夷商、于貨船到齊時、稟請海關監督衙門發給牌照、進省貿易事竣。…至夷商來省交易在城外十三行居住不准一人入城。…該夷呵嚙東粗通漢話、兼識漢字並不諳繪畫、凡外夷在粵貿易多年、能通漢話者、亦不止呵嚙東一人、該夷呵嚙東前後在澳數年、尚無不妥、亦無教唆勾通款蹟等情。<sup>28</sup>

とある。さらに呵嚙東について詳しい前歴が明らかにされている。乾隆五十七年（1792）に、彼の父親であったイギリス使節副使に随行して天津から都北京に入ったのは、彼が僅か12,3歳の時であった。この使節一行は中国国内を通過して廣州に至り帰国した。その後、呵嚙東が20歳の頃、嘉慶四年（1799）に廣州へ貿易のために来航し、同六年（1801）に帰国するまで澳門に滞在していた。そして帰国すると、また嘉慶九年（1804）に澳門に来航して澳門に在留し嘉慶十二年（1807）に帰国するまで三年余り滞在している。さらに嘉慶十五年（1810）に澳門に来航して同十六年に帰国するまで逗留した。嘉慶十九年（1814）には、イギリス東インド会社から「充當三班、隨同大班・二班經理貿易事務」として派遣され、同会社の廣州における貿易事

<sup>27</sup> 『清外交史料嘉慶朝』四、25丁裏。

『嘉慶道光朝上諭檔』第19冊926頁。

<sup>28</sup> 『清外交史料嘉慶朝』四、27丁裏～28丁裏。

『文献叢編』「清嘉慶朝中外通商史料」8丁裏～9丁裏。

務を担当する業務についている。彼の仕事は澳門に居住して、イギリス東インド会社船が廣州に来航する際に廣州に来て、粵海関監督即ち廣東海関監督に貿易許可並びに諸手続きをもとめることであった。このような外国商人は廣州行商が世話をする廣州城外の「十三行」に居住して、廣州城内には入ることは許されなかった。

ストーントンこと呵嚙東はほぼ中国語に通じており、漢字も知っており繪も上手であった。このように外国人で永年廣州において貿易業務に携わるものには中国語に通じているものがあり、呵嚙東一人ではない。ただ呵嚙東は数年にわたって澳門に居住しているなど、清朝側として要注意の人物と見なされていたのである。

表音文字文化圏に成長した **George Thomas Staunton** が、数ヶ月の船旅の間に、中国語会話を習得し、漢字までも学習したことは、中国語学習の履歴が明確に分かる事例としては貴重であろう。それまでも、非漢字文化圏の人々で若くして中国語や漢字を学んだものがいたであろうが、このように学習年齢が明らかに事例は多くない。その意味でも **George Thomas Staunton** は、少なくとも英語文化圏の人間では最も早い時期に中国語や漢字を学習したことが明確な人物と言えるであろう。

**George Thomas Staunton** と同様に幼き時期に中国語を学んだ人物に、アメリカ人の **William C. Hunter** (1812~1891) がいる。彼は13歳ほどでニューヨークのスミス商会の廣東代理店に就職して、廣東に来航するが、ほどなく中国語学習のためにマラッカにあった英華学院に赴き、そこで一年半ほど中国語を学んだ。そして、再び廣州で **J.R.Morrison** (1782~1834) に就いて系統的に中国語を学んでいる。<sup>29</sup>

**William C. Hunter** に中国語を教えた **J.R.Morrison** 自身も、中国伝道のために12歳ころから中国語の学習のために漢訳聖書の筆写に専念したと言われる。<sup>30</sup>

#### IV 小 結

上述のように、マカートニー使節団の中に、副使であった父親の力で随員に加わった **George Thomas Staunton** は、僅か12、3歳であった。しかし、彼はその時に乗船したイギリス船の中で乗員の中国人から中国語の会話だけでなく、漢字も学習し、図1に示したような筆跡で、乾隆帝に提出する漢字の文章を認めるほどになり、正使マカートニーも折に触れ、彼の活躍を賞

<sup>29</sup> Samuel Couling ; *The Encyclopaedia Sinica*, 1917,p.245.

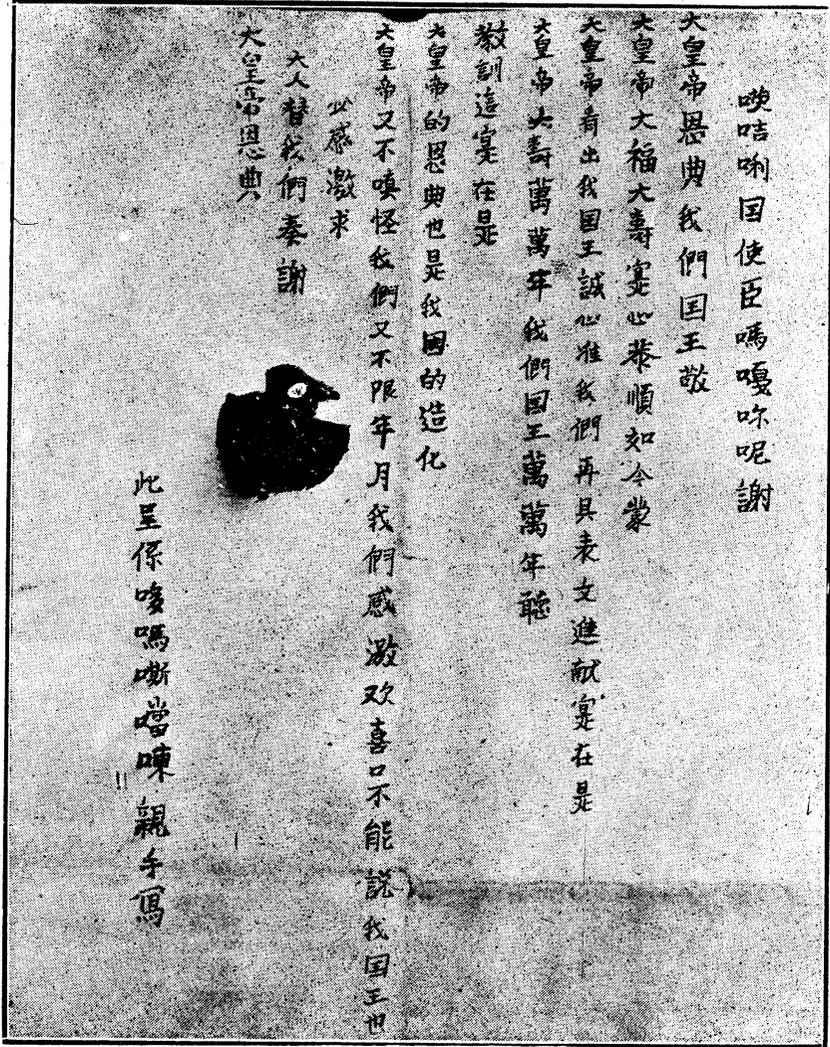
田中正美「ハンター William C. Hunter」『アジア歴史事典』第7巻、平凡社、1961年5月、459~460頁。

<sup>30</sup> Samuel Couling ; *The Encyclopaedia Sinica*, 1917,p.382.

矢沢利彦「モリソン Robert Morrison 馬礼遜」『アジア歴史事典』第9巻、平凡社、1962年4月、63~64頁。

賛した。清朝大官も、僅か 12, 3 歳の子供が漢字で文章を認めることを大いに驚いたのであった。そのことは各奏摺に「年幼狡猾」と表現されていることから如実に知られるであろう。

George Thomas Staunton の幼い時期における中国文化圏との接触は、その後の彼の生涯に大きな影響を与えたと思われる。それは、彼が 20 歳以降、しばしば澳門に來航してイギリス東インド会社の職員として中国貿易に従事していたからである。その最大の原因は、幼少時にマカートニー使節団に加わったことと大いに関係があろう。このような George Thomas Staunton に対して清朝側の官吏は、中国の地理にも詳しく中国語に堪能な人物として警戒していた。



英使馬憂爾尼謝恩書